**日曜午後例会「瞑想と霊性の生活」勉強会　第１２回　（２０２０年１月５日）**

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**勉強範囲：『瞑想と霊性の生活』(MEDITATION AND SPIRITUAL LIFE)**

**翻訳本：第１部　霊性の理想　第１章　霊性の探求　P28~31**

**原著本：PARTⅠ　THE SPIRITUAL IDEAL　１．THE SPIRITUAL QUEST　 P12~14**

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

・前回の復習：「プラフラーダの祈り」（p27）について

普通の信者の祈りは「私はプラフラーダみたいな信者になりたい。ハヌマーンみたいな信者になりたい」です。しかしプラフラーダはそのような高いレベルの信者の例は使わず、世俗的な人が、いかに体に対して、家族親戚に対して、名声に対して、お金に対して執着があるか、を例にとって祈りを捧げました。

しかしそのプラフラーダの祈りに共感するには、私たち自身がいかに深く世俗的なものに執着しているかを明確に理解していなければ不可能です。自分ではそのことを理解しているようでも、知識だけの（勉強会に参加して終わり、程度の）浅い考えではその深い理解には至れません。ですから、（仕事をしている時ではなく）瞑想の時に、深く集中して内省の実践をするのです。内省とは、深く集中して考える（ダーラナー）ことです。『ラーマクリシュナの福音』でMさんはときどき「私はそれを知っています」と答えましたが、しかし知っているだけ（あるいは読むだけ、聞くだけ）では十分ではありません。理解、それも深い理解が重要だとシュリー・ラーマクリシュナも言っています。内省をする/しないは個人的なことです。宿題をチェックするようにいちいち私がチェックすることはできません。ですから自分で、朝から夜までの自分の心や行動が、どれくらい神/永遠なものについて考えているか、またはどれくらい一時的なもの（体、仕事、食事、家族etc.）について考えているか、それをチェックします。

朝少し、夜少しだけの浅い瞑想ではできません。時間をとって座り、何が永遠で、何が一時的か、ひとつひとつ対象をとって深く考えます。たとえば家族、たとえば食べ物、たとえば体…。全体をとって内省しても、はっきりした理解は得られないからです。またある状態のときではなく、最初の状態から最後の状態までを識別しなければそのものの本質を理解することはできません。

シュリー・ラーマクリシュナはこう言いました、「ごちそうを口の中に入れると『おいしい』と感じます。でも飲み込んでしまえば、その味はなくなるでしょう？」。おいしいと感じてから飲み込むまではどのくらいの時間でしょう？　早食いの人なら1秒しかかからないかもしれない！　『おいしい』が、どれほど一時的なものか、考えてください。そして最終的には何になりますか？　便です。ごちそうはどれほど想像に過ぎないものだろうか！──このように識別すると執着がなくなります。（もちろん健康のために、食べることは必要です。ですがこのポイントは、健康ではなく、執着についての説明です。誤解しないように注意してください）

この識別を、自分の好きな人、好きなものについておこなうのは心が痛いかもしれません。しかし心が「やりたくない」と反対しても、しなくてはなりません。ギャーニは自分の好きなものまで含めて、ひとつひとつのものをとって識別していきます。私たちは、それをしていないですから執着になっています。

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**聖者たちの模範【Example of Saints】（の続き）**

**・📖 （P28 L11）**

　***ああ、この焦燥感がすべてだ。あなたがヒンドゥ教徒であろうと、回教徒であろうと、キリスト教徒であろうと、シャクティ派であろうと、さてまたブラフモーであろうと、どの道を進んでいようとそんなことはかまわない。大切なのは焦燥感だ。***

・原著（P12 L33）*Ah, that restlessness is the whole thing. Whatever path you follow, whether you are a Hindu, a Mussalman, a Christian, a śakta, a Vaiṣṇava, or a Brāhmo──the vital point is restlessness.*

私たちは自分の道だけが正しくて、他は正しくないと思いがちです。それは宗教についても、またはひとつの宗教の中の宗派についても同様で、時には争いをしています。ずっと前、私はロンドンの公園を歩いている時キリスト教の青空説教会に出くわしたのですが、そのとき聴衆の中の一信者が私の僧侶の服を見て、「あなたは何の宗教ですか？」とたずねてきました。「ヒンドゥ教です」と答えると「あなたは地獄に行きます」と言いました。私はとてもびっくりしました。日本の仏教にも宗派があって、他宗派同志の交流はとても少ないように見受けられます。

しかしシュリー・ラーマクリシュナは、どの神を信じているか、何の宗教を信じているかは重要ではないと言い、重要なのは、「あなたは自分が信じる宗教を、深く実践していますか？」ということだと言いました。シュリー・ラーマクリシュナは、常に、そしてどれくらい、大事なポイントにフォーカスしていることでしょうか！

シュリー・ラーマクリシュナは宗教宗派を気にしませんでした。実際シュリー・ラーマクリシュナのもとにはキリスト教の信者も、イスラーム教の信者も、ヴィシュヌ派の信者も訪れていました。シュリー・ラーマクリシュナの基準は、「神の信者か、世俗的な人か」でした。ですが一般的なお坊さんは、自分の宗教（宗派）か、そうではないか、です。

またシュリー・ラーマクリシュナのもうひとつの基準は、「真理の勉強をしているだけか、それを実践しているか」です。勉強するだけで終わり、いろんなお寺に行って終わり、勉強会のグループに参加してまた別のグループに参加してそれだけで何も深く実践せずに終わり、という信者もたくさんいます。

シュリー・ラーマクリシュナが指摘する大事なポイントの一つは、「あなたは自分の宗教を深く実践しているかどうか」。そしてもう一つのポイントが次に出てきます。

**・📖 （P28 L13）**

　***神は私たちの内なる案内者だ。たとえあなたが間違った道を歩いているとしても、そんなことはかまわない。ただ『彼』を慕い求めてあせらなければならないのだ。『彼』がご自分であなたを正しい道に導いてくださるだろう。***

・原著（P13 L2）*God is our inner Guide. It doesn’t matter if you take a wrong path──only you must be restless for Him. He Himself will put you on the right path.*

『ラーマクリシュナの福音』の中に、目的地（プリのジャガンナート・テンプル）に向かって行っている人が道の途中で呼び止められ、「どこに行きたいのですか？　あなたはまったく間違った道を行っていますよ」と教えてもらう話がありますが、正しい道を教えてくれた人は神のミディアム（媒体者）で、確かに神は私たちを導きます。しかし神は、目的地に本当に行きたい人を導くというのも事実です。ジャガンナート・テンプルを見るために行っても、あまり興味がなかったり、目的地と違う場所に行ってしまっても問題ないと思っている人を、神は助けることはありせん。

グル（霊性の師。スピリチュアル・ガイド）についても同じことが言えます。ある人はグルを探していますが見つからない──どうして？　なぜなら熱望をもって探していないからです。「私を導いてくれるグルが絶対に欲しい」と熱望すれば、探すまでもなく、神がグルを送り、絶対にグルが来ます。必要なのは憧れと熱望です。それはシュリー・ラーマクリシュナの直弟子たちの生涯を読んでもわかりますし、ときどきホーリー・マザーは「私はあなたにマントラを教えたい」とみずからおっしゃることがありました、通常は信者の方からマントラをくださいと頼むものですが。

ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュもその有名な例です。ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは大変な問題をさまざま抱え、心は不安でいっぱいでした。我慢することができないほど心が痛くて大変でした。彼はそのとき神に深く祈りました。そしてシュリー・ラーマクリシュナに対面することができたのです。そしてシュリー・ラーマクリシュナに率直に自分の心の状態を告げると、シュリー・ラーマクリシュナは（私はあなたのグルだという直接的な表現はしなかったが）「あなたのグルが出ましたから、これからは心配しないでください」と言いました。

「正しい道を教えてください」、「グルをお与えください」、「困っているので助けてください」、そのどれにおいても、どれくらい熱望を持って祈るか、それがもう一つの大事なポイントです。

ですが浅い実践をしている人には混乱も疑いも生じません。混乱も疑いもないのは、浅い実践をしているから何もシリアスではない、というしるしです。混乱や疑問は、深く実践していると、必ず起こります。そのときにはグルやスピリチュアル・ガイドに相談してください。そういう人が誰もいない場合は、深く神に祈ってください。

**・📖 （P29 L2）**

　***またどんな道にも誤りはある。誰もが自分の時計は正しいと思っているが、しかし実際、絶対に正しい時計などというものはありえないのだ。だがそのことが、実践をしないという理由にはならない。****（←編者注：「だがそれは、人のすることを妨げるわけではない。」と言う翻訳をマハーラージに確認後正確なものに修正しました）****もし人が神を慕い求めてこがれていれば、彼はサードゥたちと交わるようになり、サードゥの助けを借りて、できるかぎり自分の時計を直すのだ……***

・原著（P13 L5）*Besides, there are errors in all paths. Everyone thinks his watch is right; but as a matter of fact, no watch is absolutely right. But that doesn’t hamper one’s work. If a man is restless for God he gains the company of sādus and as far as possible corrects his own watch with the sādus’ helps……*

「聖典には砂糖と砂が混じっている」、つまりどの宗教の聖典にも間違いの可能性はあるのです。それを考えれば、自分の宗教だけ正しいという考えには至りません。

ではそのとき、信者・求道者はどうしたらよいでしょうか？　疑いがあるからといって、実践をちゅうちょしますか？　そうではなく、実践を始めてください。そして、助けをサードゥからもらって下さい。もちろん神はみずから導きますが、私たちを実際に導くために、サードゥを準備しました。サードゥのシステムはスピリチュアル・ヘルプ、スピリチュアル・ガイド。インドではそうです。

サードゥの仕事は神の瞑想、聖典の勉強、そして実践して悟ります。しかしお金を稼ぐことはしないので、ギブ&テイクで成り立っている社会においては、家住者たちはサードゥたちをサポートし、サードゥたちは、家住者が仕事について、義務について、正しい生活について、霊的な実践について、混乱や不安があるときに家住者たちを助けます。家族も友人も先生も誰も彼を導くことができないとき、家住者はサードゥたちの場所に行ってたずねます。

現代のカウンセラー/診療内科医/心理学者たちはほとんど浅く、賢いカウンセラーは少数です。本を読んで、テストを受けて、修了証をもらってカウンセラーになる人もいるのです。カウンセラー自身がカウンセリングを必要としている状態です。そのような人が、他の人間を導くことはできません。心療内科医も薬を処方することはできますが、中から治すことはできません。1，2分の診察で薬を処方して、それを飲み続けて病気がどんどん悪化する人たちもたくさんいます。

西洋の心理学者は、本を読み、心を分析し、研究しています。しかし魂までいっていません、心で終わって魂を信じていない。それでは助けることはできないですね。なぜなら心が人間の人格の最後（最も基礎的、最終的なもの）ではないからです。それに心自体は変化するものですし、また悟らなければ純粋な心とは何かは理解できません（つまり心とは何かを本当に理解することはできない）。頭が良くて、有名で、著作がいっぱいあっても、自分で実践していなければ他の人間を助けることはできません。

サードゥはそうではない。心を純粋にする実践をしているだけでなく、もっと深く、魂まで、永遠なもののことまで考えています。だから本当に助けられるのはサードゥたちだけです。もちろん心理学者がそこまでの実践をすれば、別です。たとえばパタンジャリの『ヨーガ・スートラ』には心についての探求がたくさん書かれており、彼は最も有名な心理学者といえますが、それだけではありません。パタンジャリ自身が実践し悟りました。フロイトもユングも有名な心理学者ですが、しかしパタンジャリは、心理学者であるとともに、聖者です。

残念なことは、昔の日本ではお坊さんによる導きがありましたが、今の日本のお寺にその雰囲気はないことです。お坊さんたちも家住者となり、彼ら自身がたくさんの問題を抱えていますから。今の日本はそうしたスピリチュアル・サポートが足りないので、カウンセラーやパワー・スポットに多くの人が助けを求めています。

シュリー・ラーマクリシュナの言うことは、「サードゥたちのところに行って、サードゥたちの毎日の実践を見てください。そしてサードゥたちは自分で実践をしているので、他人の実践上の問題がわかります。だからサードゥに相談して、サードゥの意見をシェアしてもらってください」というものです。

たまに信者は私に「マントラについて混乱があります」「実践のときに集中できない」など、霊的実践についての混乱をたずねます。その種類の相談は嬉しいですが、そんなに多くはありません。アーシュラム（僧院）の仕事のひとつがカウンセリングです。ですから霊性の道を進むときに問題があるときには遠慮せずに相談してください。

**・📖（p29L6）**

***バンキム（師に）「師よ、どうしたら神への愛を育てることができるのでしょうか」***

***師「思い焦がれる気持ち。母を慕い焦がれる子供の気持ちによってだ。子供は母親から引き離されると当惑し、彼女を慕って泣く。もし人が、神を慕ってそのように泣くことができるなら、神を見ることさえできるのだ。***

***夜明けが近づくと東の地平線が赤くなる。そのとき人は日の出が近いことを知る。同じように、もしある人が神に恋いこがれているのを見たら、彼は遠からず神を見る、と思って間違いはない」（協会訳『ラーマクリシュナの福音』初版、p701）***

・原著（P13 L10）*Bankim (to the Master): “Sir how can one develop divine Love?”*

*Master: Through restlessness──the restlessness a child feels for his mother. The child feels bewildered when he is separated from his mother, and weeps longingly for her. If a man can weep like that for God he can even see Him.*

*At the approach of dawn the eastern horizon becomes red. Then one knows it will soon be sunrise. Likewise, if you see a person restless for God, you can be pretty certain that he hasn’t long to wait for His vision. (The Gospel of Sri Ramakrishna, of .cit. p.644)*

神への愛を育てるのは憧れと熱望です。ですがこれは真似して得られるものではない。中からそのフィーリングが出ないとなりません。「子供が泣くように」と言っているから私も子供のように泣きます──そうではなく、お母さんを求めて泣きわめく子供と同じフィーリングが、中から出てこないと。

泣くことなら俳優は楽にできます。それについての面白い話があります──ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは才能豊かな人で、劇場の支配人であり、劇作家であり、劇の演出家であり、俳優でもありました。あるとき女優が彼の元にやって来て「休みを取りたい」と大泣きして懇願しました。しかしギリシュ・チャンドラ・ゴーシュはそれを認めませんでした。そのとき一緒にいた（おそらく）ヨーガーナンダジ（ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュと仲が良かった）は、「あなたの心は石の心？　彼女はあんなに泣いて頼んでいるのに」と言いました。するとギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは「あなたは彼らのやり方を知らない。教えてあげよう」と言って、別の女優を呼んで「泣いて見せて」と言いました。女優はたくさんの涙を流してみせました。ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは、「本当に休みが必要だったら私は彼女を休ませるでしょう」と言いました。

ところで熱望について、『ラーマクリシュナの福音』の中にいろいろな例が出ていますが覚えていますか？　ひとつはここに出ている「お母さんと子供」。もうひとつは「仕事をなくして人が懸命に仕事を探す例」、もうひとつは「病気で死にそうな家族を、努力して秘薬を得て助けようとする例」です。

**・📖（p30L1）**

***シュリー・ラーマクリシュナの親密な弟子たちはみな、このような燃えるような渇仰心を持っていた。バララームはそうした弟子のひとりだった。彼のシュリー・ラーマクリシュナとの出会いは次のように啓示的だ。***

***「彼はコルカタに到着した翌日、ドッキネッショルに向かった。ケシャブ・チャンドラ・セーンと彼の率いるブラフモーの信奉者が来ていたために、寺院の庭は人でいっぱいだった。バララームは師の部屋の片隅に座っていたが、一行が食事のために部屋を出ると、シュリー・ラーマクリシュナは彼を呼び寄せて、何か尋ねたいことはないかと問われた。「師よ、神は本当にいらっしゃるのでしょうか」と彼はきいた。「いらっしゃるとも」と師は答えられた。***

・原著（P13 L20）*All the intimate disciples of Sri Ramakrishna had this burning passion for God. Balaram was one among them. His first meeting with Sri Ramakrisha is very revealing:*

*The day following his arrival in Calcutta, he started for Dakshineswar. There was a great crowd in the temple-garden owing to the presence of Keshab Candra Sen and his Brāhmo followers. Balaram sat in a corner of the Master’s room, and when the party went to eat, Sri Ramakrishna called to him and enquired if he had anything to ask. “Sir,” said Balaram, “does God really exist?” “Certainly”, replied the Master.*

シュリー・ラーマクリシュナの答えが与えるインパクトは他の人と全く違います。シュリー・ラーマクリシュナは悟った人だからです。同じことを別の人から聞いても、シュリー・ラーマクリシュナほどの印象は残らないでしょう。ある有名な学者（パドマチャラン）はシュリー・ラーマクリシュナに率直にこう言いました、「師よ、あなた（シュリー・ラーマクリシュナはほとんど学校には行っていない）のところになぜ学者の私が来ているか知っていますか？　私はあなたが話すことを私は全部知っています。それらは聖典の中に書いてありますから。しかし私はそれを、あなたの口から聞きたいからこうして来ているのです」──同じことをあなたから聞きたい、なぜなら印象が深くなるから。なぜならあなたは悟った人だから。

有名な大学の学者で、神を信じていない人はたくさんいます。彼らはいろいろな論理を使って神がいないことを証明し、その種類の本をたくさん出していますが、しかしそれらは悟った人にとっては子供の話みたいです。子供は何も理解していなくても流暢に話すことがありますが、悟った人にとっては有名な学者の本も、子供がしている話のように思えるのです。しかし一般の人にはそれがわからず、その種類の本を買って、書いてあることを本当のように思います。

（本文に戻り）バララームはシュリー・ラーマクリシュナに自分の疑問を単刀直入にききました。バララームと同じ質問を、スワーミージーも当時の有名な宗教のリーダーたちにききました。けれども誰も直接的に答える人はいませんでした。シュリー・ラーマクリシュナだけが、「神はいます」だけでなく「私は神を見ています」だけでなく、「私はあなたに神を見せることもできます」と言ったのです。スワーミージーにはそれがとても深く印象に残りました。

世の中には、お金を払えば神様を見せてあげると言ってだます、見せかけのサードゥもいます。あなたの好きな神様は誰？　と聞いてシヴァ神だと知ったら、夜、ある場所でシヴァ神の儀式をし、そしてお金を払うとシヴァ神があらわれるのです。ですがそのシヴァ神は、サードゥの弟子がその恰好をして出てきたものです。またあるグループは、空中浮遊を教えてあげるといって何十万というお金をとります。空中浮遊はプラーナの関係で可能なだけで、それから霊的なサポートは何も得られません。深く自分で考えないとなりません。何でも信じていては、だまされます。

**・📖（p30L8）**

***「誰でも神を悟ることができるのでしょうか」「できるとも」と、師は答えられた。「『彼』は『彼』をもっとも身近で、もっとも親しいものと思っている信者の前にお姿をお見せになる。一度神に祈って何の反応もなかったからといって、神はいらっしゃらないなどと結論してはならない」「それでも私はずいぶん一生懸命にお祈りをしていますのに、どうして『彼』を見ることができないのでしょうか」とバララームは重ねて尋ねた。シュリー・ラーマクリシュナは笑みを浮かべて次のように尋ねられた。「あなたは本当に『彼』を自分の子供たちのように愛しい者と思っているのかね」バララームは少し考えてから、「確かに師よ。私は神のことをそれほど強く感じてはおりませんでした」と答えた。師はいきいきとした調子で、次のように語られた。「神をあなた自身よりも親しいものと考えて彼に祈りなさい。本当に『彼』は『彼』の信者達をもっとも深く愛しておられるのだ。彼らに向かって、ご自分を現さずにはおられないのだよ。『彼』は探し求められる前に、人のところにきておられるのだ。神より親しい、情愛の深いお方はほかにはおられない」バララームはこの短い会話から新しい光を得た。「彼が話されることはみな本当だ。神のことをこんなに力強く私に話した人はいない」と心の中で思った」（コルカタ・アドヴァイタ・アシュラマ版『シュリー・ラーマクリシュナの生涯』1964、p370）***

・原著（P13 L29）*“Can anybody realize Him?” “Yes,” said the Master, “He reveals Himself to the devotee who thinks of Him as his nearest and dearest. Because you do not get any response by praying to him once, you must not conclude that he does not exist.” “But,” again interrogated Balaram, “why can’t I see Him when I pray to Him so much?” Sri Ramakrishna asked with a smile: “Do you really consider Him as dear to your heart as your own children?” “No, Sir,” said Balaram after a moment’s pause, “I never felt for Him so strongly.” The Master said in an animated voice, “Pray to God thinking Him as dearer than your own self. Verily, I tell you, He is most attached to His devotees. He cannot but reveal Himself to them. He comes to man before He is sought. There is none more intimate and affectionate than God.” Balaram got new light from these words. ”Every word of what he says,” he thought within himself, “is true. Nobody ever spoke to me so forcibly of God.” (Life of Sri Ramakrishna (Calcutta Advaita Ashrama), 1964, P371)*

バララームとのこの場面について、前に説明しました（＊前回のテキストデータ参照）。シュリ―・ラーマクリシュナはバララームに家族と神とを比較してたずねています。あなたは子供を愛するほど神を愛していますか、と。

神はとても嫉妬深い。神は信者に自分を最も愛してほしいのです。他のことを好きになっても、一番の愛の対象は神であってほしいのです。「嫉妬深い」はこの場合、肯定の意味で言っています。

今までのところで何か質問はありますか？　次から新たな項に入りますから。

参加者：焦燥感がすべてだとありますね。これは自分がまだ神をほんとに愛せてないということを、焦りの気持ちで考えなさいということですか？

もちろんそれができていない。だから実践しないといけない。しかしその憧れと熱望は、まねすることはできません。

実は私はその質問をあなたがたから聞きたかった。どうして自然にそれができないのか、という質問が出てくる必要がありますよね？

参加者：はい。泣きたいけど泣けない…。

憧れと熱望が大事だと言うことはわかるが、どうして私にそれが出ないか？　それは大事な質問ではないですか？　その理由は『ラーマクリシュナの福音』の中に書いてありますが、誰か答えられますか？

参加者：信仰が必要と書いてあります。

それとはちょっと別です。どうして私たちに憧れがあらわれないのか？

参加者：バララームのように、家族が大事だと思っているから。

なぜなら私たちには欲望がまだまだいっぱいあるからです。欲望と執着がなくならないと、憧れはあらわれません。いっぱい欲望があるあいだ、絶対にあらわれません。それが答えです。

参加者：欲望をなくすためには？

心を清らかにします。欲望があるあいだ心は清らかにはなりません。心が清らかになると欲望は減ります。そのために準備をします。抑制、内省、祈り…。突然はできません、準備が必要です。

参加者：そういう準備をしていると、心がきよらかになって、泣ける。

そう。そしてもうひとつ、神に対する愛を増やすこと。ひとつは心の欲望と執着をどのように取り除くか、もうひとつは神に対する愛を増やすことです。それがmutual practice（相互補完的な実践）です。

それのために毎日、瞑想、祈り、ジャパ、神/真理の本の勉強、お寺に行く、ホーリー・カンパニー（サット・サンガ）、内省する、仕事をするときには神様を喜ばせるためにする、（仕事をやめて実践してくださいと言ってはいません）仕事を祈りの方法にする、神にお任せする、お供えする──朝から夜まで、すべて神とつながっている状態で生活する。2019年の12月の逗子例会でお話した「ラーマクリシュナ意識」の内容は、シュリー・ラーマクリシュナの信者のためにとても重要です。それを何回も何回も読んだ方がいい。自分でテキストデータにまとめたほうがいい。

そして毎日の生活がどれくらいシュリー・ラーマクリシュナとつながっているかを夕方の瞑想のときにチェック（内省）したほうがいい。それをすると、自分がいかにシュリー・ラーマクリシュナを思い出していなかったかがわかり、びっくりするでしょう。しかし、それが進むための方法です。なぜなら熱望や憧れをまねすることはできないからです。また、たまに神を思い出して涙しても、安定したものでなければなりません。常につながっている状態が肝要なことです。

ですから内省が必要となってきます。それはホーリー・マザー、シュリー・ラーマクリシュナ、ブラフマーナンダジー、皆言っていることです。彼らの助言は皆、「内省してください」です。それが努力です。努力をできるだけすると、シュリー・ラーマクリシュナの信者は少なくとも亡くなる時、絶対にタクール（シュリー・ラーマクリシュナ）があらわれます。そうホーリー・マザーは言っています。しかし今、幸せが欲しいのだったら、今実践してください。

死ぬまで苦しみ悲しみ不安恐れにさいなまれるのがいいのか、今幸せになるのがいいのか、どちらがいいですか？

木に果物がなっています。それらは熟して食べごろです。あなたはその実がおちてくるまで待っていますか？　そうではなく「shake the tree! shake the tree!」木を揺らす努力をして果物を得てください！

各人の力の量もそれぞれです。しかし神はそれを、自分にある力を、使って欲しいと望んでいます。

（以上）